

第二言語習得論に基づく小学校英語活動の実践に関する研究

田野町立田野小学校 教諭 梶原和美

1 はじめに

小学校の英語活動においては、子どもが英語に慣れ親しみ、英語に興味・関心を高めるような活動を中心に据えた授業を行うことが求められている。平成20年版小学校学習指導要領では、「児童の発達の段階を考慮して表現を選定するとともに、子どもにとって身近なコミュニケーションの場を設定し、子どもが積極的にコミュニケーションを図ることができるように指導する」ことの必要性が述べられている。

しかし、小学校英語活動実践の手引作成協力者会議座長を務めた影浦は、現在の状況を次のように述べている。「研究開発学校や拠点校における英語活動の実践が進むにつれて、指導内容が高度になってくる傾向がある。そして、それと比例して子どもたちの英語嫌いの割合が増えてきている。¹」ベネッセ教育研究開発センターが、全国の中学2年生を対象に中学入学前の英語の学習や英語に対する気持ちについて調査をしている²。「好き」、「楽しみだった」と回答した生徒はともに4割台だった。この状況に対し、影浦は、英語嫌いが増えた理由として、①指導内容の量の多さ②指導内容の難しさ③指導法の複雑さ④子どもの実態とのギャップ、を挙げている³。これまでの私たちの指導は、ドリル的だったり、あれもこれもと盛り込み過ぎて授業を複雑に難しくしてしまっていたのではないだろうか。活動においても、子どもたちが本当に言いたいことを言わせていたのだろうか。教師が用意した表現を無理やり言わせていたのではないだろうか。英語活動は、子どもたちの興味・関心や意欲の育成を重点に考えるべきである。また、影浦は「小学校におけるコミュニケーション能力は、子どもの日常生活に必要な簡単な英語を使う力であって、決して高度なコミュニケーション力を求めているわけではない」とも述べている。

平成20年版小学校学習指導要領に示された「外国語活動」の内容を実践するには、子どもたちへの様々な配慮や工夫が必要である。私は、子どもたちが、自分で考え、自分のことを話せるようになり、さらに楽しく活動できる授業にしたいと考えている。そのためには、英語の音をたっぷり聞き十分に繰り返して発話していく言語習得の流れに沿った授業展開と、子どもたちにとって身近な場面を設定し、子どもの興味・関心に基づいた自分のことを伝える活動の工夫が必要である。また、それらの活動においては、ことばの機能を理解することやことばをたくさん取り入れるための工夫も求められる。

2 研究目的

子どもが英語に慣れ親しみ、英語に興味・関心を高めるような授業を行うために、(1) 英語活動における教師のコミュニケーション観、(2) 子どもたちに育みたいコミュニケーション能力、(3) 第二言語習得の流れに沿った英語活動の工夫、について研究や考察が必要なのではないかと想定した。

研究方法は、文献研究による考察を行う。

3 研究内容

(1) 英語活動における教師のコミュニケーション観

¹ 影浦功・小学校英語セミナー委員会編『小学校英語セミナーNo. 31』明治図書、2008年、P. 4

² ベネッセ教育研究開発センター『中学校英語に関する基本調査報告書』2009年、P. 14

³ 上掲¹

平成20年版学習小学校指導要領で、コミュニケーション能力の重要性が謳われており、次のように強調されている。

- 1 外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう、次の事項について指導する。
- (1) 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。
 - (2) 積極的に外国語を聞いたり、話したりすること。
 - (3) 言語を用いてコミュニケーションすることの大切さを知ること。

出典：文部科学省『小学校学習指導要領解説・外国活動編』2008年

授業の中で、ただ単に子どもたちにコミュニケーション活動を体験させればいいのではない。その質が肝心である。そのためには、子どもたちに何のためにコミュニケーションをさせるのか、教師自身がコミュニケーション観を持たなければならない。大きく二つの視点から捉えることが出来るのではないかと考える。それは、「自己表現」のためのコミュニケーションと「人間関係」を広めていくためのコミュニケーションである。

ア 「自己表現」のためのコミュニケーション

英語活動において、子どもたちが短いことばであっても自分のことばで一生懸命伝えるような活動を多く作っていくことが大切である。その理由は、その活動が、子どもたちが英語を通して自分をアピールできる機会となるからである。様々な活動の中で、子どもたちに自分自身について考えさせ、友だちや先生に自分の心を表現させていく。母語では言えないことも、英語では言えてしまうこともある。その中で新たな自分を発見することもある。また、昨日まで知らなかったことばを使って、自分のことが言えるようになったことは、それまでできなかったことができるようになるという喜びや楽しさとなる。同時に、自由に使えない言語だから工夫や努力をしなければ自分の思いが伝わらないことにも気づく。英語を使って自己表現することで伝え合うことの楽しさや大切さを学び、そのことがコミュニケーション能力の素地の育成につながると考える。

イ 「人間関係」を広めていくためのコミュニケーション

英語活動においては、自分とは異なる他者を理解しようとする態度を育むことが求められている。これは、異文化理解や国際理解など国境を越えた人々との関わりといったことだけではない。コミュニケーション活動の中で、普段はあまり話さないクラスの友だちと関わることで初めて知ることもある。それがきっかけとなり、それまでその友だちにもっていた印象や見方が大きく変わることもある。コミュニケーションが、お互いの知識や考え方、気持ち、人間関係などに与える影響は大きい。

以上の二点から、コミュニケーションは、単なる情報の交換ではなく、心と心を通い合わせた人と人との関わり合いから育まれる自他理解と人間関係づくりと考えることができる。

(2) 子どもたちに育みたいコミュニケーション能力

村野井は、Bachman(1990)およびBrown(2000)のモデルをもとに、より総合的にコミュニケーション能力をとらえようとする構成要素を図1のようにまとめている。この中には、考える力や異文化に対する受容的な態度・姿勢、世界についての様々な事柄についての知識・考えが含まれている。子どもたちに

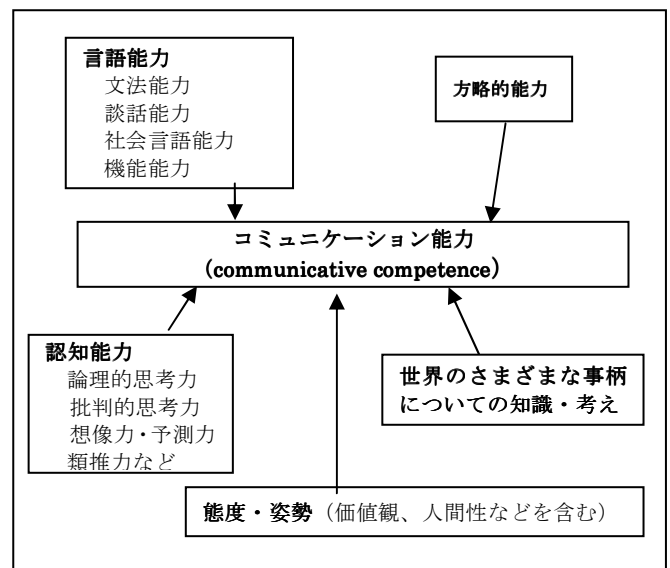


図1 第二言語コミュニケーション能力の構成要素

出典：村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店、2006年

育むコミュニケーション能力は、言語能力以外の要素があることを示すものである。

ア 方略的能力

コミュニケーションは、言語・非言語（ジェスチャーや顔の表情等）による活動を通して、相手の反応により話の内容や表現方法を変化させながら継続させていく。そのような活動の中で、お互いの意思や感情を伝え合うことによって、人間関係を円滑に保っていく。しかし、実際のコミュニケーション活動で、いつもスムーズに会話が進んでいくことはまれである。コミュニケーションを継続させていく工夫と努力が必要になってくる。そのために必要な能力が「方略的能力（語彙等の不足等を補ってコミュニケーションを続けていく能力）」であると捉える。これは、例えば、単語がわからないからと言ってコミュニケーションをストップしてしまうのではなく、表現方法を工夫したり語彙以外の手段を使ってでも意図を伝えようとするものである。

大城は、コミュニケーション能力の視点から見た日本の英語教育のモデルを図2のように表し、学ぶ語彙や表現が限られている小学校段階では、方略的能力が重要と考えている。また、これまでの日本の英語教育の中で最も不足していたのは、「方略的能力」ではないかとも指摘している。大城が、アメリカの中学生と交流をした中学3年生に「現実のコミュニケーション場面で最も障害になったものは何だったか」というアンケートを行った。その結果「単語がわからないために話せなかった」と答えた生徒が80%もいた⁴。知らない単語や表現があるとコミュニケーションを中断してしまうという傾向がある。こうなった理由を、大城は、これまでの日本の外国語教育が学習の初期の段階から文法・語彙を重視しすぎたために、方略的能力を使う機会を失ってしまったからではないだろうか⁵と指摘する。コミュニケーションを円滑に行うためには、言語力が乏しくても、ジェスチャーや言い換えなどの方略的能力を発揮し、自分が使える英語を駆使しながら、コミュニケーションを継続していこうとする気持ちや態度が大切である。英語活動では、子どもたちが下記のような方略的能力を使いながら活動を行う場面を多く仕組み、「こうすれば通じた」という体験を積ませることが重要だと考える。

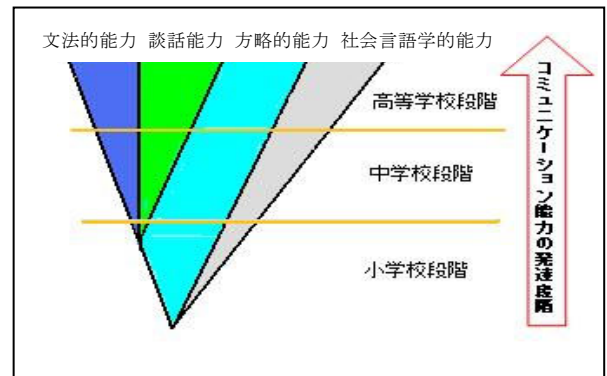


図2 Savignon の「逆ピラミッド」を日本の外国語教育にあてはめ改変したもの

出典：松川禮子・大城賢『小学校外国語活動実践マニュアル』旺文社、2008年、P48

- ①ことばが思い浮かばない時に、ジェスチャーや顔の表情で伝える。
- ②ことばが思い浮かばない時に、知っていることばを使って言い換えをしたり、知っていることばを組み合わせた造語で、伝える。
- ③聞いていてわからない時は、繰り返しを求めたり、内容を確認する。
- ④考えている間、つなぎのことばを入れる（沈黙の時間を作らない）。

また、相手との関係を円滑にするための潤滑油としての英語についても大切にしたい。相づちや日常的なあいさつ、人に何かを頼む時の表現、お礼や謝る時とそれに対応する表現、などがある。このことは、平成20年版小学校学習指導要領において、「コミュニケーションの働き」として示されている。適切な声の大きさやスピード、視線も大事な方略的態度である。

以上の考察から、方略的能力の視点を授業の中に入れることで、コミュニケーションを重視する英語

⁴ 松川禮子・大城賢『小学校外国語活動実践マニュアル』旺文社、2008年、PP.46～47

⁵ 上掲⁴

活動の目標に迫ることができるのではないかと考える。

(3) 第二言語習得の流れに沿った英語活動の工夫

最近の研究では、母語と外国語とは同じ習得過程を取ることが明らかにされている。人間は、生まれてからはじめの一年間は、家族や周りの人々からことばを繰り返し聞き続ける。次第に意味のわからない喃語を発し、一語、二語文、三語文となり、そのうち会話ができるようになる。子どもは、周りの人々が話す会話を聞いて意味を直感的に理解しながら模倣し、発話することを通してことばを身につけてきた。知っていることばを使って相手に話すことができると、自分で言えた喜びを感じ、相手の反応によってさらにその喜びは膨らんでいく。このような言語習得の過程が子どもにとっては自然な流れであり、子どものことばへの意欲や関心を高めていくものである。もちろん、英語活動は母語習得と同じようにはいかない。しかし、こういった言語習得観を踏まえた英語活動を行うことで、子どもたちはことばを学ぶ楽しさを体験することができるはずである。

ア 第二言語習得の過程

村野井は、Gass(1997)のモデルを参考に、第二言語習得のプロセスを図3のように提案している。

第一のプロセスは、耳や目を通して入ってくる表現や音に気づくことである。気づくとは、注意が向いて何かを探知している状態である。インプットで重要となるのは、量だけではなく質である。村野井は、インプットの条件として次の4点を挙げている。
 ①理解可能（現在のレベルよりほんのちょっと上のレベル）であること、
 ②興味を持っている内容であること、
 ③真正性のある本物（現実のコミュニケーションで使用される言語）であること、
 ④音声と文字両方のモードで取り入れること。

第二のプロセスは理解である。気づかれたインプットから理解されたインプットになるためには、言語形式と意味のつながりを把握し、その言語がどのような機能を果たすのかを理解する必要がある。学習者は、耳や目を通して入ってきた表現や音に何度も触れるうちに、「この表現はこういう意味だろう」「この表現はこういう場面で使うのだろう」と推測をしていく。与えられた表現について仮説を立てていくのである。

第三のプロセスは「インテイク（取り込む）」である。理解されたインプットが、学習者の言語知識として定着する段階である。「理解されたインプット」の段階で学習者が立てた仮説を話したり聞いたりすることで検証し内在化が進む。仮説に基づいて行った発話が、相手にうまく理解された場合には、仮説は認証されるのである⁶。また、村野井は、「内在化は、学習者がコミュニケーション上の必要性に迫られて、「理解」のプロセスで学習者の中に生じた中間言語の仮説に基づいて、話したり書いたりすることによって進められる⁷」としている。小学校の英語活動においては、コミュニケーション活動や自己表現活動を行う場を設定することになる。

第四のプロセスは「統合」である。統合は、学習した表現が長期記憶として学習者内部に蓄えられ、

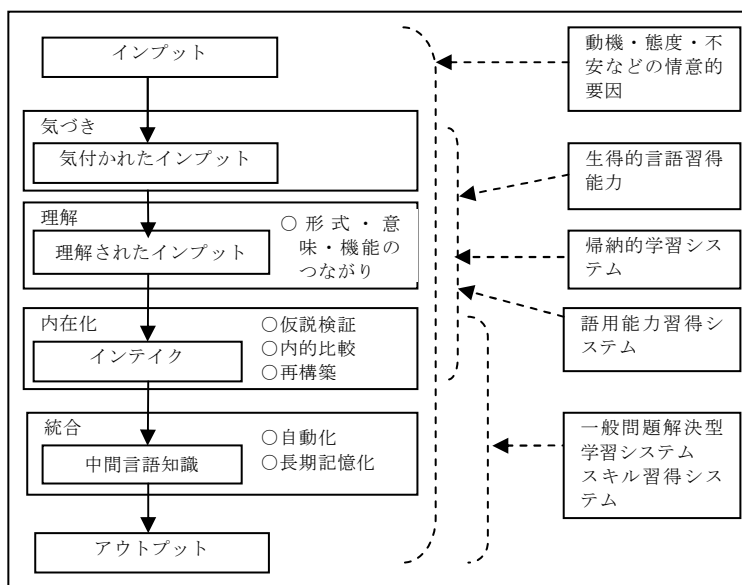


図3 第二言語の認知プロセス

出典：村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店、2006年

⁶ 村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店、2006年、P.14

⁷ 上掲⁶P.14

自動的に使いこなせるようになった段階である。村野井は、「インテイクとして学習者内部に取り込まれても、2、3日たてば記憶から消えてしまうような言語知識は統合されたとは言えないとし、また、記憶の中に入っているけれど、実際に使用する際にゆっくり時間をかけてからでないと使えない場合も統合されたとは言えない⁸」としている。

ここまでのプロセスが完了したものがアウトプットとなっていく。

また、村野井は、第二言語能力はインタラクション（お互いのやりとり）によって伸びるとし、その理由として次の4点を挙げている。①インプット理解の機会が与えられ、理解不可能なインプットが理解可能なインプットになり習得が推進される。②言語形式と意味及び機能のつながりをつかむことができる。③対話相手からフィードバックを得て、自分の言語規則の正しさを検証することができる。④アウトプットの機会が得られる。このことから、コミュニケーション活動を英語活動の授業に必ず位置づけていくことが重要だと考える。

イ 英語活動の具体的な授業展開

第二言語習得のプロセスに基づき、単位時間の授業展開を表1のように組み立てた。

(ア) 雰囲気作り

英語活動では、子どもたちの不安やストレスが高くなることが予想される。このような心的状況をリラックスさせたり、ストレスを低くするために、ウォームアップは重要な役割である。ウォームアップの内容は、高学年の子どもたちの発達段階に合ったもので、例えば、知的好奇心をくすぐるクイズなどが適している。クイズは子どもの日常に定着している遊びであり、自然な雰囲気の中でクイズの英語表現を聞いて答えることができる。また、クイズに正解するためには問題をしっかり聞き出題者の表情や動きをよく観察しなければならない。これらのことは、図3の「動機・態度・不安などの情意的要因」に配慮した活動となる。

(イ) インプットからアウトプットへ

第二言語習得のプロセスに沿って、「聞く（インプット）活動」から「口まねする活動」、「記憶し自分のものにする（インテイク）活動」、「自分の意志で選んで発話する（アウトプット）活動」へと段階的に構成する。

はじめに、本時で使用する会話場面の提示を行う。

子どもたちに英語表現を楽しく聞かせ慣れ親しませるとともに、英語の意味や使い方を理解させていく。ここは、インプットを気づかれたインプットから理解されたインプットに変えていくための重要な場面である。その際には、教師がデモンストレーション（寸劇など）を行ったり、ジェスチャーや視覚教材（フラッシュカード・映像・具体物など）を使って、子どもの興味・関心を引き付けるとともに、理解を助けることが大切である。提示の方法について、向山は、「一つひとつの単語や一文一文の訳を与える

過程1		指導過程と留意点
雰囲気作り	1 あいさつ 2 ウォームアップ（前時までの復習）	<ul style="list-style-type: none"> 歌やチャンツ、体の動きを伴ったゲーム、クイズ等でリラックスさせ楽しい雰囲気をつくる。たくさんの英語を聞いて理解して反応する活動がよい。 日本語モードから英語モードに切り替えさせる。
インプット ↓ インテイク ↓ アウトプット	3 本時のテーマ（本時で使用する会話場面の提示）	<ul style="list-style-type: none"> 今日はどんなことやるとか話題の提示を行う。子どもが思わず言ってみたい、やってみたいと思う動機付けの大事な部分。 教師のデモンストレーション、ICTなどによる状況設定を見せ、聞かせる。表現の大体を理解させ、見通しを持たせることが大事。
	4 言葉や会話のプラクティス（口まねする活動 → 記憶し自分のものにする活動）	<ul style="list-style-type: none"> 歌、チャンツなどで英語の音やリズムに慣れる活動、ゲーム等で英語の表現を聞いたり話したりすることに慣れる活動を行う。 テンポやリズムを変化させながら楽しく繰り返し行う。 コミュニケーション活動で必要な表現を理解し、繰り返し聞いたり話したりしながら、表現に積極的にかかわらせていく。
	5 自分の意志で選んで発話する活動	<ul style="list-style-type: none"> 英語の使用場面に重点を置き、必然性のあるコミュニケーション活動を行う。
まとめ	6 評価 7 あいさつ	今日の活動を自分の言葉で振り返る。

⁸ 村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店、2006年、P.16

のではなく、対話全体の様子、対話全体の意味をできれば舞台のように現実的に状況を示す⁹⁾と述べている。子どもが身近な場面だと感じる状況設定の中で、一語一語分析しないで一固まりの表現として扱い、対話の文脈と音声の形を示し意味を理解させるのである。また、脳科学でエピソード記憶という概念がある。このことについても、向山は、「ストーリー全体の中で自分が会話したという体験が、たとえ擬制でも流れを持った出来事として記憶に残り、脳はパターン認識する¹⁰⁾」と説明している。子どもが、臨場感のあるストーリーの中に入って相手とのやり取りを行うことでことばの意味や使い方を理解していく。さらに、情動（嬉しい、おかしい、びっくり、怒りなど）を伴うような状況設定を行うと、より脳内に記憶が残っていく。また、状況とともに聞こえてきた英語表現の意味や使い方を思考している子どもに、教師がすぐに英語表現を日本語に訳してしまうのは望ましくない。子どもは、自分のもっている知識から英語表現の意味を推測していくのである。

次にインテイクの段階に入る。ことばや会話のプラクティスでの留意点を、樋口は「子どもが、無理なく次の学習や活動に移ることができるレディネスを確実に作ること¹¹⁾」だと言う。例えば、野菜の名前の定着が不十分なため、自信を持って子どもが発話できないのに、先を急いで買い物の活動に入っても、活動が挫折をしてしまうのは当然のことである。すべての子どもが活動を楽しむためには、スモールステップを踏んだ指導手順を考えなければならない。英語活動では、同じ表現を異なる活動で、楽しく繰り返し使いながら学ばせていくことが大切である。子どもは目先のことに集中して楽しんでいるうちに、同じ表現を知らず知らずのうちに繰り返すことになる。以下に示すのは、参観した授業で行っていた発話練習の手順である。この手順で練習をした後、全員が積極的に相手を見つけて活動に取り組んでいた。

- ①英語表現を担当やALTの後について、子ども全員が声をそろえて繰り返す。
- ②クラスを半分（列や男女別等）に分ける。問いと答えに分かれて英語表現を繰り返す。
- ③ペアで練習をする。1回目は全員で同じ答えを言う。2回目は本当の自分のことを答える。
- ④代表の子ども一人に、他の子ども全員が質問をする。質問された子どもは、本当の自分のことを答える。

次はアウトプットである。子どもたちが英語表現に慣れ親しんできたなら、発話練習を十分に行い、自己表現活動やコミュニケーション活動を行う。高橋は、「対話者との間にインフォメーションギャップ（情報格差）が生じている時に、コミュニケーションを図ることに意義がある¹²⁾」と述べている。日常生活では、お互いのインフォメーションギャップがコミュニケーションを引き出すと考えられている。自分の知らないことを相手に尋ね、相手の知らないことを相手に伝えようとするのが、コミュニケーションを生じさせるきっかけとなる。このような情報格差の状況を教室に発生させ、コミュニケーションを行うことの必然性を作り上げることが重要である。子どもたちが、自分の知らないことを知ることができたり、単語一つでもいいから自分のことが英語で言えれば、それが自信につながり、次の活動への意欲となっていく。

ウ 子どもたちのやる気を高めるために

子どもへの励ましや褒めることば、一人ひとりの成長につながる評価は大変重要である。心理学の用語で「即時確認の原理」がある。良い現れや適切な行動があった時に、すぐにそれを評価してやることで、同様の行動をさらに促すことができるという原理である。特に、子どもの興味・関心は他のことにすぐ移るので、そのことが心の中に大きな位置を占めているうちに褒めてやるのが大切だと言われて

⁹⁾ 向山浩子『「小学校英語」子どもが英語を好きになる指導の究明』東京教育技術研究所、2010年、P.118

¹⁰⁾ 向山浩子『TOSS 英会話指導はなぜ伝統的英語教育から離れたか』東京教育技術研究所、2007年、P.133

¹¹⁾ 樋口忠彦・行廣泰三『小学校の英語教育』KTC 中央出版、2001年、P.130

¹²⁾ 高橋美由紀『これからの小学校英語教育の構想』アプリコット、2009年、P.15

いる。

また、授業構成を考える際、単元全体を通して、子どもたちに無理のない段階的なスモールステップを踏んだ学習過程を組むことが大事である。単位時間の指導においても、子どもの意欲を持続させるために短い時間でできる活動を複数組み合わせる方が、子どもたちが飽きることなく取り組むことができる。また、これまで述べてきたように、同じ表現を違う活動の中で何度も繰り返し扱うことで、理解を徐々に深め、少しずつ慣れ親しませることができる。

このような活動を通して、子どもたちの心に「できる」「わかった」「言えた」という成功体験をたくさん積み重ねていきたい。このような子どもたちの学びの過程を大事にしていかなければならない。

4 まとめ

本研究では、子どもが英語に慣れ親しみ、英語に興味・関心を高めるような授業を行うために（１）英語活動における教師のコミュニケーション観、（２）子どもたちに育みたいコミュニケーション能力、（３）第二言語習得の流れに沿った英語活動の工夫、についての考察を行った。

（１）については、コミュニケーションとは、ことばを使って、自分を表現し、相手を理解し、自分とは異なる価値観を認識しながら様々なことを共有していく楽しい活動であると捉える。このようなコミュニケーションを教室で実現できる力が教師には求められている。

（２）については、コミュニケーションを円滑に進めるためには、方略的能力や態度を育てていくことは大変有効と考える。その一方で、方略的能力を伸ばすためには語彙力が必要である。授業では、子どもたちが使えることばをたくさん取り込んでいくための活動の工夫が求められる。

（３）については、人間は、最初、ことばを次のように獲得してきた。①実物や絵を使い、②ジェスチャーや表情を使い、③片言の音声を使い、④何度も繰り返し、⑤お互いの意思を通じ合わせようと努力しながら、ことばで伝え合うことやその仕組みを作り上げてきた。英語活動においても、この過程に沿うことが自然な流れであると考えられる。

今後、本研究で考察したことを実践、検証し、さらに研究を深めるとともに、子どもたちにとって楽しくわかりやすい授業に臨んでいきたい。

【参考文献】

- ・村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店、2006年
- ・小泉清裕『現場発！小学校英語ー子どもと先生に伝えたいー』文溪堂、2009年
- ・吉田研作『新しい英語教育へのチャレンジー小学生から英語を教えるためにー』くもん出版、2003年
- ・樋口忠彦・行廣泰三『小学校の英語教育ー地球市民育成のためにー』KTC中央出版、2001年
- ・影浦功『新しい時代の小学校英語指導の原則』明治図書、2007年
- ・松川禮子・大城賢『小学校外国語活動実践マニュアル』旺文社、2008年
- ・金谷憲『英語授業改善のための処方箋』大修館書店、2002年
- ・卯城祐司・蛭田勲『小学校教育課程講座外国語活動』ぎょうせい、2009年
- ・高橋美由紀『これからの小学校英語教育の構想』アプリコット、2009年
- ・向山浩子『TOSS 英会話指導はなぜ伝統的英語教育から離れたか』東京教育技術研究所、2007年
- ・向山浩子『「小学校英語」子どもが英語を好きになる指導の究明』東京教育技術研究所、2010年
- ・文部科学省『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』、2003年
- ・文部科学省『英語ノート1』『英語ノート2』『英語ノート1・2指導資料』、2009年
- ・文部科学省『小学校外国語活動研修ガイドブック』、2008年
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説・外国語活動編』・『中学校学習指導要領解説・外国語編』、2008年